

長編
小説

戦国悪党伝

戸川幸夫

力川幸夫

戦国悪党伝



読者へのお願ひ

あなたはこの本を読まれてどんな感銘を受けられたでしょうか。その感銘をぜひ、あなたの親しいお友だちや、お近くの方々にお伝えください。それといっしょに「読後の感想」を、左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。

なお、この本には一字でも誤植がないようにしたいと思ひますので、もしも、お気づきの点がありましたら、あわせてお教え願ひます。御職業、年齢などもお書きそえくださいませんか。

東京都文京区音羽町三

光文社出版局

神 吉 晴 夫

昭和三十四年九月十日印
昭和三十四年九月十五日初版発行

定価二八〇円

戦国悪党伝

著者 戸川幸夫
東京都港区青山南町六ノ五九

発行者 神吉晴夫

印刷者 山元正宜

印刷所 三晃印刷株式会社
東京都文京区柳町二六

発行所

株式会社 光文社

東京都文京区音羽町三ノ一九
電話大塚(94)一一〇〇一
振替東京一一五三四七

(小泉製本)

万一、落丁本、乱丁本がありましたら本社でお取りかえいたします。

目次

群盗の砦 とりで	五
美女見舞い	六
飢狼 うろ の牙 きば	七
山塞 さい 焼討ち	八
梅一輪	九
女ごころ	一〇
畏 おそ	一一
流れゆく雲	一二

裝
丁
中
尾
進

戰
國
惡
党
伝

群盜の砦とりで

一

風が激しかった。そして犬たちがまっ先に騒ぎだした。一匹が吠えだすと次の犬が吠え、また別なのが吠えた。

ギャギャーン……一頭が悲鳴をあげた。斬られたらしい。犬たちは逃げながら吠える。

「わあッ、伏影党だあッ……」

村人たちが悲鳴をあげて飛びだした時は、野武士たちの一団は疾風のように家々の戸締りを蹴破けやぶって乱入してきた。

子供が泣く、女の悲鳴が続く。

外は今にも降りそうな空模様で星一つなくまっ暗だった。

「野郎ッ、手向けえしやあがると、こうだッ……」

怒号と共にゲツと唸うなって倒れる気配。

どこで何がどうなっているのか見当もつかないが、破壊と掠奪りやくだつが続けて行なわれていることだけは気配で察せられた。

村人の誰かが火の見に駆け上がった。

「野盗襲来！」の急を近隣の村々に知らせるために力まかせに摺半鐘すりはんしやうを叩きだしたが、間もなくばあっと

燃え上がった火の手にあかあかと浮き上がると、それを待っていたように一筋、二筋、下から箭が伸びてきて、脇腹から肩口に射貫かれると木槌を持ったまま転げ落ちた。

火の手は数カ所から上がり、炎は野盜たちの殘虐心を一層かき立てた。

さすがに手慣れていた。いづれも猛々しい面魂の野武士たちは、どこを捜せば何があるかを前もってしっていたかのように、手早く嗅ぎだして懷中に突っこみ、背負袋に投げこんだ。

部落はおおよそ四十戸、一戸に大人が二人ずついるとして力をあわせれば、この村だけでも八十人の戦鬨力がそろうのに、百姓たちは怯えきって僅か二十人たらずの野武士たちの蹂躪にまかせきっていた。

一番、ひどくやられたのは言うまでもなく名主の茂左衛門の邸で、まっ先に襲われ、火をつけられた。それというのも茂左衛門が日ごろから二人の牢人を抱え、村の男たちに竹槍を習わせ、

「こんな乱れた世の中じゃあ、御領主なんて大きな声では言えないが、在ってもないようなもの。頼るのは自分たちの力だけじゃ」

と万一の時の備えを固めていた、ということが野武士たちの耳にはいつていたからだろう。生意気なと狙われたのだ。

飼い牢人の一人が左右から突きかけられた槍にひとたまりもなくのめると、もう一人の牢人はまりのようになつて闇に逃げこんだ。

頼みに思うお侍が殺られてみると、もう百姓側はすくみ上がる一方だった。それでも目の前で娘や、女房が髻面に抱きすくめられてもがくのを見るとカッとなつて組みついて、斬られた男たちも五人以上はあった。

炎はめらめらと藁屋根を這い、火の粉を舞わせ、烈風に煽られた火は少々の間隔は問題でなく次から次

へと燃え広がった。

火のあかりで村が昼のように明るくなると、村をとりまくようにして騎馬に乗った野盜たちが要所要所に佇んでいるのが分った。

その中に特に逞しい白馬に跨った野武士がいた。五十に手の届く年ごろだが身体は大きくて、がっしりと岩のような感じ、眉も太くて濃く、眼も鷲のように鋭い。鼻も高く逞しく口も大きい。身にまとった胴丸もひと際みごとだが、何よりも見事なのは頬から顎にかけて渦を巻くように生えた虎髭だった。これが首領の伏影藤太と覚えた。パチパチ、バリバリと燃え上がる炎、泣き叫ぶ村人の姿、ばたばたと必死の抵抗を続けながら担がれてくる女たちの様子を心地よさそうに眼を細めて眺め、

「お首領、こりやあ南の家からで……」

「お首領、この娘はいかがで……」

荒らしまわった配下どもがいちいち彼の前に運んでくる掠奪品や女たちに鷹揚に頷いた。

野武士にもいろいろあった。野盜山賊と変な事となく掠奪殺人をこととする者もあれば、地方の大土豪として隠然たる勢力を占め、一旦合戦となると戦国大名と組んで、敵陣を攪乱したり、乱波となつて謀報、謀略を行なう者もあり、時と場合ではその両方をやつのけるものもあった。伏影藤太などはその口だと言えた。

「ふ、ふ、ふ、燃えるわ、燃えるわ。川上部落もみるみる灰よ」

「雉子も鳴かずば射たれまい、か。茂左衛門の奴、身の程も知らずに天下に名だたる奥羽の虎、伏影藤太様に楯つこうなんて謀反氣を起こしたばっかりに……へへへ。奴あ権三が叩斬った」

追従を言ったのは副首領格の狼源兵衛だった。

「や？」

伏影藤太は、すかし見るように体を低めた。白馬がカッカッと蹄で大地を掻く。

二人の配下に担がれて、裾の乱れもわからぬほどに、ぐったりとなった美しい娘が担がれて来たからである。

「へえお首領、名主茂左衛門の娘で、まだ手つかずの上玉。お首領にお供えしようと……」
みなまで言わず、

「顔をあげてみろ」

藤太の瞳がキラリと好色に光った。

「む、気に入った。稀に見る戦利品じゃ」

もう駒の足もとに曳き据えられている七、八人の女どものことも忘れて
「その女を俺の馬につけろ」
と命じた。

戦利品——といっても食糧と少しの金目のものと女たち——を馬につけると野武士たちはぞろぞろと引き揚げていく。

この辺りは山が迫っていた。山裾を回って流れる大瀬川の響が聞こえる。

藤太は横抱きにした茂左衛門の娘さよの柔らかな感触を楽しみながら駒足を急がせた。首領が首領なら配下も配下だった。狼源兵衛ら主だったものも首領を見習って一人ずつ掠めた女を馬につけて後に続く。

しかし、一行の前、十間ほど先に二騎先行させて様子を見ながら進ませたのは野盗としてはもっともな心得であった。

しばらく行くと河原であつた。大瀬川がくねり、行手を塞いでいるのだった。そこまでくると白々と夜が明けてきた。

浅瀬を捜して憂々と河原を歩いていた先頭の駒足がびたりと止まった。

「やいやい、何でえ貴様あ……」

権三ががらがら声を張り上げると、弥八が槍を構えた。

ひたひたと川波の寄せる岸辺に、波の音を愉しんでいるかにも見えて一人の男が肘を枕に、ゆうゆうと寝そべっていた。年の頃は三十前後か、瘦せてはいるが筋骨は逞しく、色も黒い。総髪を蔓で束ね、鼻下というよりは口許に近く八字髭を蓄えている。牢人とも見えるし、狩人とも見える異様な格好だった。黒っぽい汚れた着物に、同じ程度に汚れた野袴をつけ、白い犬の皮を敷いて、その上に馬鹿長い太刀造りの大刀と、恐らく野武士たちにとっては初見参に違いない火縄銃を抱くようにして横たえていた。

「やい起きろッ」

弥八は槍の穂先を顔の前にちらつかせた。牢人は眠っているわけでもあるまいが返事もせず、鼻っ先の槍の穂に驚いた様子も見せず平然と動こうともしない。

「野郎、起きねえなッ」

弥八は槍をしごいた。あとからの連中もとととと集まってくると、ぐるりと牢人の周囲をとりまく。

「馬鹿かな」

藤太は首をひねった。牢人の様子を見ると眠っていない証拠に薄目をあけて首をふり

「ひい……ふう……みい……よ……」

馬足を算えているのだ。

「こいつ……」

藤太は弥八に、突け！ と目くばせした。

弥八の槍が牢人の咽喉のどを目がけて閃ひらめいた。パッ！ と血がはねた、と思ったのは凄まじい水音をたてて牢人の頭越しに川に落ちた弥八の水飛沫みずしぶきだった。

牢人は？ と見るとゆうゆうと立ち上がり、じろっと一同を見回した。不敵な面魂である。

「うぬッ！」

こんどは権三が斬りかけた。が、これも同様、弥八の後を追って水びたしになった。

「それッ！」

狼源兵衛の合図に一同がわっと斬りかけようとするのを

「待てッ！」

と藤太は止めた。そして牢人を見すえると

「天晴あっぱれな腕だな」

と切り返すように

「お主ぬしの白馬もいい代物しろものだなア」

牢人は、ざつくばらんな口のきき方をした。川から這い上がってきた権三や弥八のことは、へとも思っていない。

「何でこんなところで寝ていたな」

「眠くなつたからさ」

牢人はけろりと答えた。牢人の鋭く光る切れ長の眼は、馬の背につけられた女たちや掠奪品を早くも読

みとっているはずだが、それには一言も触れずに身仕度にかかった。犬の皮の上から大刀を斜めに背負った。

長い、刀身だけでもゆうに四尺はあるだろう。朱鞘しゆざう、朱櫛しゆづかという派手な造りでこれと鉄砲だけは似合わない美しい。

こんな長い刀を背負っていざという時に抜けるかな、それとも白痴脅おどしか、いやいやたった今、配下二人を河中に叩きこんだ腕前には並々ならぬものがある。

何者だ——伏影藤太は馬上からじっと牢人の様子に眼をつけた。

「おい、その鉄の棒はなんだ」

狼源兵衛が牢人の手にした火縄銃に眼をつけて問うた。

「うん、これか？」

牢人は白眼をくるりと見せてニヤツと笑うと

「十間離れた敵を斃たおすどえらい棒さ」

と茶化すように言う。

「鉄砲だな」

藤太は傍から言った。彼も火縄銃を実際に見るのは初めてだが、鉄砲という外国製の新武器が十二、三年前にポルトガル船によって大隅国種子ヶ島おのすみのたねがしまに伝えられ、それをわが国でも模倣して泉州堺せんしゅうさかいで造られ始めたということは聞いていた。

「さすがは大將だ。南蛮渡来なんばんの鉄砲とはよく見た。おい、そこいらの、これが鉄砲というもんだ、よく見ておけ」

恐れ気もなくそう言い放つと、ケ、ケ、ケ……と鶏のような声で笑った。

「ところでどうだ。お主、俺のところに来んか」

味方につけて損はない、と踏んだ藤太は牢人に言った。

「山賊の仲間入りか？」

「山賊ではない。野武士だ」

「野武士？」

牢人はキラッと眼を光らせると、はじめて女どもに気がついたように

「野武士にもピンからキリまであるからな、お主も野武士なら、俺も野武士。同じ野武士だが性質はだいぶ違うようだナ」

「何だと……」

狼源兵衛が槍をとり直すのを藤太は片手で押さえて

「聞こう」

と首領の貫禄を見せた。

「俺あな、野武士は野武士だが、首領もなければ配下もないねえ。広い天地にたった独りの野武士さ。だがな、まだ山賊や追い落としの真似はしたこともねえ」

「それで……」

「山賊の棲み家なら真ッ平だ。野武士なら話あ別さ」

「野武士だよ」

藤太は凄味を声に現わして

「どうだ、来ないか」

「うん」

牢人はちよつと小首を傾けたが、直ぐに

「よかろう。行くとしよう」

軽く頷いた。

「だが言っておくが、俺はさっきも言った通り上もなく下もねえ独りが好みだ。客分だからな、間違つても配下扱いはするなよ」

「わかった」

「首領」

源兵衛が、それでいいのですかい？ と藤太をなじるように詰めよるのを牢人はちらと横目で見て

「ケ、ケツ、ケツ、ケ、ケ……」

とまた鶏のように高笑いし、権三の馬にひらりと跨またがった。

藤太が手を挙げて振った。馬の列が再び動きだす。

と——牢人はびたつと馬を停とめ

「ほい、忘れてたよ」

と直ぐ前をゆく藤太に声をかけた。

「何だ？」

藤太も馬を停めてふり返る。

「女だ」

「女？」

「うん、馬につけた女どもだ」

「ああ、これか」

藤太はぐったりと馬の背にうち伏している茂左衛門の娘さよを見た。

「これがどうした？」

「女は捨ててゆけ」

「捨てる？ 何故だ」

「女は邪魔だ」

「……………」

「それに村娘を拐すなどは山賊のすることだ」

牢人はもう副首領にでもなった態度で、源兵衛以下の者どもをふり返り

「そこらに積んだ女を置き、汚ねえ真似はするなよ」

「喧ましいッ」

源兵衛がとうとう腹に据えかねて怒鳴った。

「お首領の物好きをいいことにしやがって……これが俺たちの仕来りだ。村を焼き、財宝を奪い、女を掠める。それが何で悪いのだ。どうせ乱れた世の中だ。大名は大名並みに、野武士は野武士並みに大小の差こそあれ掠め取るのが戦国の慣習よ。」

おいらの仲間にはいる以上は、おいらの掟につべこべ抜かすな」
そうだ、そうだというような顔が源兵衛の背後に重なった。